

Toyohiko Kagawa's Concept of Religion: With a Focus on the Relationship between Religion & Science

CISMOR Seminar

Dōshisha University
April, 25, 2017
Stig Lindberg
stlberg1@gmail.com

1

発表者の賀川豊彦批評



賀川豊彦は色んな意味で時代を先立った思想家および運動家だったのである。東洋人でありながらも西洋の宗教と哲学・科学に染まりそしてその東西の交差するところに独特な宇宙観を編み出したのである。賀川はピエール・ティヤール・ド・シャルダンの如き物質の世界をより深く突き詰めた形而上哲学者だったと言えるのではないだろうか。換言すれば、賀川は特殊な現代自然神学者だったであろう。

2

2

Three Theses:

- Religion & Science are separate but complementary magisteria. 宗教と科学は別な認識論的な領域だけれど互いに補助する。
- Religion is by nature evolutionary. 宗教は資質的に進化的である。
- Kagawa's evolutionary religion is in effect Paul's theology of growth into stature of Christ. 賀川の進化的宗教は基本的にパウロの「キリストの姿への成長していく」という神学と同じである。

Outline

- *Kagawa's Cosmology* (hierarchy, self-expression, One & many, purpose, evolution)
- *Religion for Kagawa* (global consciousness, art of life,)
- *Criticality of Self-knowledge*
- *Science & Religion*
- *Faith versus Fact*
- *Religion Evolves*
- *Applications for Contemporary Theology*

Outline of Problem & Solution

Religion is the creation of value/the process of becoming in the temporal realm

creation of value is process of approaching the eternal/perfection;
creation of value is necessary for temporal beings to evolve to the state of religious consciousness

Religious consciousness itself evolved, culminating in the enlightenment of Christ (God's fatherhood/immanence="Abba" + "Immanuel"; Redemptive Love)

Evolution is necessary because creation was created in a state of inferiority & imperfection. Why creation was created in a state of imperfection is a mystery. Is everything with (self-) consciousness necessarily consigned to the realm of time and contingency?

Redemption is the process of regaining original status = evolving into autonomy, global consciousness, creativity, redemptive power = Perfect Personality (Idea/理念)

God as verb (becoming) is (*creation of*) Value (Aristotle's & Aquinas' God = pure action); **God as noun** (being) is Perfect Personality (Idea/理念)

5

Kagawa's Cosmology: *hierarchy*

- To understand & appreciate Kagawa's view of religion it is necessary to understand his cosmology—the hierarchy of value and existence.
- **Idea** (理念) is at the top, followed by **Purpose** (合目的性), followed by **Value** (価値), followed by **Spirit-mind** (精神), followed by **life** (生命), followed by **matter** (物質). Nonetheless, matter precedes life and spirit, comprising the medium and feedback mechanism for them. Without matter there would be no life or spirit:

—「物理の世界また科学の世界は決して唯物の世界では無い。力と、変化と、成長と、選択と、法則の世界は物質以上の理念の約束を意味している。之等の約束は組み立てられて合目的性の世界を産む。合目的の世界は価値を産み、価値は経済を産む」。(13:26)

—「永遠に休息を知らざる尊き靈の表現せられたる動きを肉(物質)と云ふのだ。(略)動く魂は肉を是認する。肉を離れて靈の地上に働く道がない。」(21:178)

6

Kagawa's Cosmology: *order of existence*

- In terms of chronological order of existence, Kagawa's hierarchy is reversed:
matter=>life=>mind-spirit=>value

—「脳は完全な一個の機械である。しかし、この機械が直ちに意識となるのではない。これに生命が通じ、その生命に自決目的性(意志)が与えられて、初めて意識が生命の世界に関係をもつようになるのである。もちろん意識があっても自決目的を実現できない場合もある。「夢」のごときがそれである。夢の世界においては、注意もあり、連想もあり、記憶も再現せられ、判断も推理も行われるが、執意が現実の世界と全くかけ離れている。(改行)かかる潜在意識はいかにして起こるか?これは脳髄機構がもつ特有なる本能であって、この「夢」のような機構なくしては、自決目的の実現は絶対に不可能であるといつてよい。」(13:438 15話・下巻発表者)

Kagawa's Cosmology: *hierarchy of mind & matter*

- 1) mind is the core of matter. 2) matter is a discovery of will and serves as a medium of feedback for mind. 3) matter is life lived in space. 4) Without matter, there would be no means of history or evolution.

—「(略)即ち私の境地は物心一如の世界である。心は物質の核子であり、物質は意志の発見として心に作用し得る世界、その世界に於て、物質——即ち空間生活が凡てを支配するならば、歴史は消極して機械の記録となり、その反対にその物質生活を生活と意志が支配することによって物質の上に記録を残し、此処に真の歴史と進化が成立するのである。」

(4:110:『生命宗教と生命芸術』、大正十一年・張譯は発表者)

Kagawa's Cosmology: *life*

- Kagawa states that Life is ontologically a necessity and is eternal and indestructible, at least as a law. He analogizes life to electricity which is indestructible.

— 「或る物質的条件に「生命」の永続性が経験せられたものに違ひないのです。それで、その物質的条件を破壊しても「生命」の法則は永遠に破壊されないことは電子が不滅であるやうなものです。」 (4: 148, 強調は発表者)

9

Kagawa's Cosmology: *self-expression*

- In the beginning, there was no being or existence, only The One as *Idea* (理念) or *Pure Subjectivity* (純粹主体). The step from *Pure Subjectivity* to mentality (精神) is not clear, but according to Kagawa, all mentality has an intrinsic necessity to self-express, giving rise to the world of phenomena & objectivity (matter,物質).

— 「凡ての靈は、肉の形をとらねばならぬ。肉を離れて表現はあり得ない。それで化身の方向がきまる。美を離れて表現はあり得ない。それで化身の形式が定まる。そして美を整理するのが善の任務だ。」 (2: 7)

- Somehow, phenomena as self-expression of mentality is trapped in spacetime and is inferior in its finitude and therefore in need of redemption.

— 「受肉することは自己制限であり、制限せられた自己表現である。肉は働く為めである。精神の制限である。歴史的イエスを迎えるだけが、受肉者を知る唯一の道では無い。自分が生くる時代に新しく受肉することを味ひ直して見ることが、更に大きな任務である。」 (2: 78)

10

Kagawa's Cosmology: *self-expression*

- Being/existence is temporarized expression (「存在」は時間に左遷された表現) of Spirit-mind, which is God in evolution. The evolutionary process works in opposite order to the hierarchy: matter 1st, life 2nd, spirit-mind 3rd. As temporarized expression, existence is inferior to its progenitor (創始者) and in need of redemption through growth back to its origin. It does this through creating value, which is one of Kagawa's definitions of religion.

- trapped in spacetime

- 「物質に対する、私の見方は、頗る備しているかも知れない。併し私は、質量と空間を占める面積と丈で、物質を考えたくはない。私は深く、物質にからむ法則と、物質の運動に依る、化学的適合性を見て、物質が只単なる、無生物であると考える事は出来ない。それは生命の原料であり生命の衣であるとも云へる。不幸にして、人間の靈魂は物質を過ぎずして、他の靈魂に話しかける事は出来ない。この意味に於て、物質は靈魂の中補体であるとも云へる。(略) この意味に於て物質は靈魂の包蔵体であり、伝導体であるとも云へる。(略) 誤解してはならぬ事は、此の場合の物質は、靈魂の幅員を示す物質であって、靈魂の存在を否定して、唯物論者の物質ではあり得ない。だから私にとっては、物質は凡て生物である。物質が生物であることを気付かない人が頗る多い。それは生命を化学方程式で説明せんとする人を云ふのである。化学方程式は符号である。符号は物質ではない。符号は死んだものである。しかしそれ等の学者にとっては、物質も生命と何等連絡の代、私物であり、符号の結晶した様なものと考えているだらう。学者の物質は、彼の頭脳の生産品であった、神の創造した物質と大分距離がある。神の創った物質は生命を生み出したけれども、学者の組み立てた物質は、生命と何の関係もない藻抜の殻である。生命の方程式はまだ出来ない。併し物質は学者の方程式が出来る前に、生命を其の中から湧き上がらして居る。物質は永遠の謎である。それは客観のみを覗いて居る者にとっては不滅の實在であるが、自己に帰る者にとっては、自我の影にしか過ぎない。どうしてこの二つの対立があるか、私に理解は出来ないが、私は物質を眞の實在とはよう考えない。眞の實在は私であり、心である。物質は宇宙の心の一断面でらうと私には考えられる。不幸にして物質の型に依るほかない為に、宇宙の心も、その側面を物質として我々に示しているのではないかと、私は考えている。(22:80)」

13

Kagawa's Cosmology: "The One" & the Trinity

- The Trinity (三位一体) is God as understood by finite human minds which are confined to the dimensions of spacetime. Purpose is what binds the One with the many. It is only through accepting the existence of purpose that monistic plurality (organicity) can be explained.

— 「目的性において初めて、一元的多様性が説明できる。目的性は必ず客観性に初まり、主観性によって動機化せられ、実践追求により、客観、主観が総合化、すなわち、目的性包含の世界に進む。この境域は「絶対」の世界であるといえる。」 (13:424, 強調発表者)

14

Kagawa's Cosmology: *Purpose*

- Kagawa's cosmos is permeated by purpose which is generated by the qualitative differential between the One and its inferior self-expression. Purpose occurs from the combination of this differential (格差・差異) and intention (意向・意志). Example: "what is" (である) & "what could be" (成り得る).

「宇宙の窮局目的の見極めはつかないが、出発の目的の構造が分かるのでそれによって六つのことが言える。①宇宙には目的がある。②それは生命の方向に向いており、③生命の目的は意識の方に向いており、④個性の『心』は社会的組み立ての方に向いており、⑤社会的『心』は歴史的進化発達と宇宙意識の覚醒の途上にあり、⑥それは宇宙の創造進化を可能ならしめた精神の助力を待つ方向に向いている。(ここにいう精神の助力とは宗教的に言えば神の助けの意であらう。)」 (13:468-9)

Kagawa's Cosmology: *Purpose*

- Because the cosmos is permeated by purpose, it is necessarily evolutionary, meaning it undergoes a process of change/growth in time toward a specific goal (reconciliation/redemption).

— 「」

Kagawa's Cosmology:
purpose as source of mental life

- According to Kagawa, purpose drives the creation of all mental life, including the baseline of consciousness and its derivatives of cognition, memory, association, imagination, and invention:

— 「人間の意識は簡単でない。記憶、連想、判断、推理、学習、体験、想像、注意、確信、情緒、勇気、同情等知情意のすべてが総合的に意識にのぼってくる。しかし意識は『目的』の所産である。心理的目的選択により認識が可能になり、それによって記憶が生まれる。それは『目的性』の時間上の再現である。非空間的記憶の再現は連想隣、その組み立ては想像となる。そこに発明がある。非空間的『ひろがり』によって宇宙像の再構成が可能となり、個性的宇宙意識が誕生する。」 (13:466)

17

Kagawa's Cosmology:
Purpose

- skjlskaj

— 「目的といえば、すぐ人間の自由意志から出てくる、自己決定による目的を考えるが、宇宙目的に存在する目的は自決目的だけが唯一の目的ではない。目的は不思議な構成をもっていて、びっくり箱のように、その内側に幾つもの組み立てをもっている。そして、その一つ一つが、各自の目的をもって大きな目的を成立せしめんとしている。

」 (13:424-425)

18

Kagawa's Cosmology:
Purpose = Intelligent Design

- Kagawa sees matter as "God's dermis" and suggests purpose and design behind the veneer of phenomena:

— 「現象の奥には合目的性意匠があると云ふことを許容するならば、「神」を物質の背後に肯定することになる。」 (13:206)

Purpose: human vs. machine

「機械と人間の目的に大きな差がある。人間には、内包目的がある。 (本質主義)。自分が勝手に目的を決定することができる (実存主義)。すなわち、目的が、人間の内側にある。だが、機械には目的が外側に付いている。 すなわち、機械自らが、目的を決定できない。機械を作った人間が、その目的を決定する。」 (13:415:かっこは発表者)

Kagawa's Cosmology: *evolution*

- Kagawa accepts change as inherent in and fundamental to the relative universe. He does not accept change as fundamental in the absolute universe of law and purpose. He declares that there is certainly a world of spirit-mind which cannot be explained or described through material force. This invisible world of spirit-mind is the realm of religion—of selection/choice, purpose (based on value) and of development.

—「弁証法は生命の原理を説明しない。(略)私は変化が宇宙にある事は信ずる。しかしそれは相対の世界においてであって、絶対の世界において、法則及び目的の世界においては変化は根本的な本質でないと考える。否私は生成の他に選択性もあれば、成長もあり、秩序もあれば、合目的性もあり、物的力で説明出来ない生命の世界が織存し、その生命の世界の内側に選択性と目的性をもって発展する弁証法によって、絶対の説明出来ない精神の世界のある事も信ずるものである。」

(13 : 217)

21

Kagawa's Cosmology: *evolution*

- In Kagawa's cosmology, God, or "God-as-Life," evolves:

—「生命として動く神に、その神の内部に更に新しき神を創りつつある如く私は感ぜられる。否、神自身が成長するのでは無いのか！生命は進化の形式を取っていると人間に感ぜられる。生命は意識の中に生え上り、自由の中に飛躍する日を待つものの如く感ぜられる。」 (21 : 19)

Kagawa's Cosmology: *evolution*

- 1) Physical evolution & evolution of value. 2) "Evolution" is just another way of expressing teleological growth. 3) Evolutionary order from matter to human consciousness (i.e. matter=>life=>mind-spirit)

—「そこで、物質が単純なものから複雑なものに、価値の無いものから価値あるものへと進化するやうに考へる進化論が現れてくるのである。然し之は要するに、生命の成長と云ふ意識を外にして考へらる可きことでは無いのであって、物が人間の意識にまで進化すると考へることは、人間の意識が考へ出したことで、人間の意識が無ければ、物そのものをも順序よく配列することはできないのである。」 (4 01 「生命宗教と生命芸術」、大正十一年)

22

Kagawa's Cosmology: *evolution*

- Human evolution attenuates belief in external fate. As human intellectual life flourishes, new powers are obtained and belief in external fate diminishes. Humans learn that they are their own masters and they end up modifying their attitudes toward evil and suffering.

—「併し人間が漸次成長すると共に、我等は最早そうした宿命(古代ギリシャ流の大衆理念)、そうした外部的宿命に依りなくなつた一等、人間の精神的生活が豊かとなり、その内側に新しき力を得るに至るや、外部的の宿命に依りなくなるのは当然の事である一等、我等自身の中に於いて決定する事が出来て、宿命に囚われる事なしに済むのである。斯うした人間の成長に依つて、悪及び苦に対する態度は自ら変化せざるを得ない。此の成長に伴う態度の変化の上にも明らかに現はれて居る。」 (2 1 01 「苦難に対する態度」、大正十二年)

Kagawa's Cosmology: *Holography?*

- Is Kagawa a type of holography supporter? He states that matter is like a screen on which God reveals all manner of amazing phenomena to us and that his role is to dance on that screen.

—「神は物質と見えるスクリーンの上に、色々な不思議なる現象を私達の為に現わし給う。そして、私それ自身も、またこのスクリーンの上に躍らねばならぬ役目を持っている。」

(2 : 192)

25

Cosmology Recap (復習)

- Phenomenal world (現象界) began with matter and evolved into life, with consciousness evolving later.
- Matter is the concretized self-expression (具現した自己表現) of the divine and therefore not totally "other" as in the "ex-nihilo" interpretation of Genesis.
- Because of its origin in the divine, matter naturally longs for (re)union with its source, but because of its inferior status, (劣等地位) the phenomenal world ("creation") requires divine intervention (神的とりなし). This intervention is religion, epitomized and concretized in Jesus Christ.

26

Religion for Kagawa

- Kagawa's understanding of religion is expressed in various ways, but perhaps the most fundamental expression is man's response to his awareness (cognition) of the Transcendent/Whole. (人間の「超越」・「全体」に対する認識) It is an awareness that each individual is part of a larger entity/project, like a cell which has a life of its own but serves a larger purpose in comprising an organ.
- Kagawa terms this awareness *rentai-sekinin* (連帯責任) and identifies it as the peak of evolved consciousness in man, which Jesus, as the first person in history to do so, apprehended.

Religion for Kagawa: *Part & Whole*

- 「(略) 宗教は永遠につながる時間と、無限に拡がる空間と、それに充満する生命の問題から割り出して単なる安全の道でなくて、冒険的な十字架の道を選び、単に表面的な人間と人間との関係だけではなく唯一人居る時にも、宇宙全体に対する責任から彼の生活を決定し、人間性を超えて、宇宙意志に添わんとする大きな努力を必要とするものである。つまり宗教は道徳より根本的なものである。それは生活全体の焦点をなすものであり、宇宙意志の体験者として地上を歩くものの生活である。(6 : 232)」

Religion for Kagawa: *Part & Whole*

- This expression hints at Kagawa's cosmology of "the One & the many," which has ancient roots and is the basis for my dissertation on Kagawa's *theology of organicity*. (Parmenides, Plotinus, Thomas Aquinas, etc.)

- Resources:

1 Clarke, Norris, W., S.J., *The One and the Many: A Contemporary Thomistic Metaphysics* Notre Dame, Indiana: Univ. of Notre Dame Press, 2001)

2 Heisenberg, Werner, Irns Yamazaki Kazuo. 「部分と全体」 (*Der Teil und das Ganze: Gespräche im Umkreis der Atomphysik*)

29

Religion for Kagawa

• Religion = art of life

1. Life is sovereign because Life is God-in-action. God, in perfect wisdom, meets out to each individual different circumstances. Life is the medium for the individual to make art. Religion is the artisan's tool kit, the actor's script with which he improvises.
2. If Life is sovereign, what about problem of evil? This too is a function of God's perfect wisdom which can redeem human malevolence: "what you meant for evil, God meant for good." (Genesis 50:20) Additionally, the innate vulnerabilities of the finite striving for infinitude guarantees pain and evil: 「宇宙目的から見れば、悪の起源問題は明白である。それは宇宙目的に到達し得ないことから起るのである。宇宙目的は選択の組み立てによるものであるから、その選択の条件に微細な故障が起っても、悪は発生する。微細な故障の発生することは「有限」の世界においては、避けることができない。しかし、有限の世界に組み立てが始まり、「生命」が生まれ、「生命」の奥に「精神」が発生し、「精神」が無限絶対にまで接近しようとする意欲を起こしたことは勇壮なものであるとせねばならない。」 (113, 453)

30

Religion = art of life

- Religion = art of life. The universe/life is evolving and its telos/goal is perfect personhood. Religion is the art of understanding life and relating to it as an organ (the whole) which is growing toward the goal of **perfect personhood** (autonomy, solidarity, redemptive love, creativity, renewal). Each individual is a critical component of the larger organ.

— 「人格は宇宙進化の最後の頂点である。」 (7: 208: 「愛の科学」、大正十三年)

Religion for Kagawa: What is "Life"?

- What is "Life"? This is a natural question for highly sentient beings like humans, but Kagawa downplays sophisticated philosophical and scientific considerations of Life, arguing instead that Life is the great given which is self-evident and to be experienced (lived) rather than rationally understood or philosophized.
- 「生命」を物質的に分解せんとする人がある。然しその時に生命は生命で無い。それは条件であり、具備すべき約束であって、「生命」そのものではない。「生命」は「生」きる可き世界であって、論じたり、考へたりする世界では無い。それは刻々に進んで行く世界である。」 (4, 61)
- 「現象的相対性の世界に於て、一つ絶対的のものがある。それは生命である。」 (4, 63)
- 「この無限に進む自由の力、この進化することを指して『生命がある』というのである。」 (3, 32)

Religion for Kagawa: What is "Life"?

- Kagawa believes Life is an eternal mystery. Why it is and how it is are questions humans will never know.

— 「〈生〉は永遠の謎だ：「生は永遠に未解決の形で与えられているのです。生命は箱詰のやうなものではなく、永遠に一方の口が開いているものであります。」 (4:144:『生命宗教と生命芸術』、大正十一年)

33

Religion for Kagawa

• Art in "Art of Life"

1. Art is creative, subjective, fundamentally individual/particular yet with ability to speak to others, whereas philosophy & science are restrictive in their objectivity, are reason-based and universal, thereby ignoring human subjectivity. ("work out your salvation" ... "so that others may see your good works and glorify your father in heaven")

34

Religion for Kagawa

1. in philosophy & science, laws are codified and have an independent existence aside from human subjectivity, whereas in the art of living, the few cosmic laws Kagawa identifies are dependent upon individual subjectivity to be honored and concretized/actualized (e.g. redemptive love)

Pragmatic Nature of Religion

- Classical religion (Christianity) deals in the speculative realm of timeless eternity which, by definition, no living person can experience. Kagawa too talks frequently about eternity, especially as a descriptor of God (Absolute Infinite), but he rejects eternity as being of concern to people since it is beyond their realm of experience:

— 「」

- Religion for Kagawa is necessarily experiential. There is little, if anything, speculative about it. In particular, Kagawa's religion focuses on religious experience and feeling:

— 「宗教に於て感情の論理が如何に大切なものであるかを私は物語りました。それで永遠に宗教は感情によって支配されませう。然し感情が進化し、浄化し、人生そのものの躍動の裏に神を祭ると云ふことが、宗教感情の奥殿であることを知るやうになれば、宗教は美しい姿を以って全人生活に取り入れられます。之を私共は体験宗教と云って居ります。」 (21:322)

37

Religion is not a Formula

- If Religion as a means of achieving the aims of life were formulaic, life would be much simpler and straightforward. Because Religion is not formulaic, it is a messy process of trial, error, and regeneration. That is why Kagawa characterizes Christianity as a diaper-changing (お尻拭き) religion.

— 「(略) 私はショペンハウエルの厭世論などが、時間的錯倒から来て居ることを信ずるものである。即ち『人間我』は常に時間の上に進展するものであるから、悪いと云へば、時間が悪いのである。即ち変転そのものが悪いのである。進化そのものが悪いのである。価値そのものが悪いのである。然しそれは実に無理な訳であって、時間上の進展が待て無い、初めから全知全能で無ければならぬと云ふのであれば全くお話にならぬ。そら、神になりたいと云ふ欲望と意志は誠に結構なことである。かく欲求することによって、必ず得られるのである。欲求の無いものに得られたことが無いが、得られ無いから欲求し無いと云ふのは時間を信用し無いのだ。得られることは向ふについて居るのだ。前方について居るものを、後方に抱はさうと云ふてもそれは無理だ。それだから、時間の上だけの辛抱だ。」

38

Kagawa's idea of Faith

- Kagawa was preaching within a predominate context of Buddhism, Enlightenment humanism, and Scientism. Therefore, he felt the need to distinguish faith from personal effort and scientific fact:

— 「信仰は精神修養と同じものではありません。精神修養は自分で出来ないことを、無理にしようとする努力で、」 (4:141)

— 「(略) 神の支配したまう生命の世界に於いて、智慧以上の可能性の世界を信ずることを信仰という。智慧は、事実だけのことしか知ることが出来ないが、人間の知る事実はあまりにも限られている。それに比べて生命の世界は人間の知っている以上のいろいろの可能性を持っている。その可能性を歴史的発展の傾向から信ずるのを信仰という。」 (2:233)

Kagawa's idea of Faith & God

- God is the intelligence (organizing principle) behind the manifested world, which is the first shore (沿岸) of what we call "the real"/life. Faith is one type of epistemology. It is aided by but not defined by reason and inspiration.
- 「信仰とは即ち目前の問題を信じなくて、物の奥に秘められた、偶然と見える奥にある。機械の奥にある。宇宙の御力を信ずることである。即ち単なる唯物史観とは違う。彼等は、神の衣である実在と取り違えている。あらゆるものは神の意匠の発現であると思う。」 (2:193)

Kagawa's idea of Faith

- Faith is not principally for the believer but for God so that God can communicate to us. God needs us to accomplish something. According to theologian John Caputo, *God-the-Insistor* (言い張る神) needs us to become manifested as God.
- 「信仰は自己のためでなく神のためであります。私達が神様にして貰いたいことがあるために信仰するのではなく、神様が私に要求し給うことがある故に信ずるのであります。『神我れを要す』という信念に立って出発するのであります。」 (4:140)

41

Kagawa's idea of Faith: *Possibility*

- There is a realm of life for believers accessible only through faith. There is no other way than through this realm to find maximum meaning & significance in life. This realm of meaning contains creativity, restorative power, and power of preservation. This realm is hidden to natural human wisdom.
- 「これを見ても、キリストの言われた信仰のうちには、神の生命のうちには人間の智慧以上の創造力と補修力と、保護力との、三つの可能性がかくれていることを測定することを教えていられるのであるこの生命の可能性の神秘は、まことに智慧、知識に絶し、我々が信仰によるほか、人生をより有意義に開展せしめることが出来ないことを我々は学ぶのである。」 (2:233-4)

42

Kagawa's idea of Faith

- Faith is believing in the world of possibilities which transcends wisdom. Wisdom knows only facts, which are limited in scope; but the world of Life contains a variety of possibilities beyond the scope of human knowing. Believing in the historical unfolding of these possibilities is called "faith."

— 「この愛の型の回復によって、人間は神の子にまで回復する可能性が与えられた。この可能性の信仰が、真に神に対する信仰である。それは全くキリストの賜物である。即ち、キリストの愛がなければ、我々に、神に対する信仰さえ起こらない筈である。」 (3:141)

— 「私は明らかに云う。私は奇跡を信ずる一人である。それは自然法に対する目的の世界を認めることであり、宗教に云う奇跡とは、目的世界に於る可能性と云うものであると考える。」 (3:33)

Faith & Self

- Kagawa states that salvific faith uncovers one's true self. It is a process of discovery. Since the only way to see God is through self, knowing oneself is critical. This is *Kagawa's methodology*: proceeding from what is most immediately given (to a particular consciousness), i.e. *self*.
- 「救いの信仰は自我の掘り下げとなる。」 (2:502)
- 「(略) この『我』を出発点とし無ければ認識の世界に浮び出ることには不可能であったのだ。それで実在の本体を第一に尋ねるならば『我生く』と云ふ直観の世界が最も早いのである。」 (9:217)
- 「目的を持った有機体の秩序ある組織を、生命と云うのである。そう考えて来るならば機械論も、目的論も、皆意識の生産であって、自我を中心として延長されるものである。であるから、其根本的において、機械論と目的論とは相闘うべきものではない。相反すると見える二つのもの世界も、実は自我の裡に、融合している筈のものである。従って科学も、宗教も、自我によって、又自我の為に存在しているのである。出発点は自我である。」 (3:8)

Criticality of Self-knowledge

- Why is self-knowledge so important for Kagawa and his understanding of religion? Because it is the self which sees and interprets God (window unto God), therefore understanding self is the first step in extricating oneself from erroneous, detrimental understandings of God.

45

Kagawa's assessment of the *current state of science & religion*

- Kagawa observes science's preeminence in society and its power to contribute to the value of society and laments religion's corresponding marginalization. He asserts that religion is life itself, and, therefore, trying to separate it from science is absurd. Religion is a movement of value creation, evaluation, preservation and repair.

—「今日では科学による価値運動が旺盛であるために宗教の価値創造力を馬鹿にする傾向があるが、宗教が生命そのものを意味している以上、科学と宗教とを分離することは愚かである。宗教は価値運動であり、価値の測定、創造、保存、補修をなして行く運動である。」 (2 516)

46

Kagawa's assessment of the *current state of science & religion (cont'd.)*

- Social science is woefully lagging behind natural science and must evolve and produce new discoveries/inventions. Specifically, what I am talking about is the need for a progressive sense of social solidarity and responsibility among the populace.

—「然し、近代の如く科学文明が高度に進歩した以上は社会科学に於ても発明と発見が無ければならぬ。この社会科学に於ける発明と発見を、私は、社会意識的、道徳的自覚にその基準を求めんとするものである。即ち、宇宙観的にも目醒めた靈魂が他人の欠点を互いに、補修し合い—創造的に亦再創造的に（宇宙修繕の原理に基づき）贖罪愛的精神を以って結合して行くところに真の社会が、経済的にも生まれ得ると云ふことを考へているものである。」 (13巻. 23)

Religion & Science: *Complementarity*

- Kagawa envisions and advocates for a unitive, interdisciplinary cosmology in which science and religion are equally critical and mutually complementary components.

—「宗教即科学といふ目的論的宇宙観を把握して科学教育をやりたいのである。科学教育だけでは、不具で不徹底である。」 (13:43)

Religion & Science: *Complementarity*

- Science is incompetent to reveal the realm of life involved with free will. With regard to life being able to self-determine, it possesses a certain omnipotence. For those who believe, life possesses a certain purpose apart from determinism which can direct a person's individual life. Life possesses intrinsic purposiveness which it works to expand and preserve. Science has made many important contributions to religion and is a miracle in its own right. Science has created itself magnificently for our sake.

—「私は生命の世界には、今日までの科学が教へられぬ、自由意志に合致する様な色々な事があると考へて居る。「生命」は自己決定をすると云ふ意味に於ての全能性があるから、之を信ずるものには必然性の外に或目的に沿ふ歩みをとると考へても少し差し支えがない(略)私は生命には内的目的があることを信ずる。それが凡て必然的のものばかりではないと考へて居る。「私」を通じて小さい乍らも自由意志が発生して居る以上、生命はその内的目的を打ち殺さ無いように保護してくれると信じて、少しも差し支への無い事である。(略)生命の世界は今の科学的智識と云ふことの外に、色々な内的目的を補助する力添へがあると信ずる事は、宗教意識に取っては無くてもならぬ条件である。科学は科学で宗教に対する大きな寄与を持って居る。科学それ自身が今日では大きな奇跡である科学は我々の為に大きな自己内容を創造してくれた。」 (4 57 50-00)

49

Religion & Science: *Complementarity*

- Religion has some accountability to science, which can purify religion and turn it into a holy art. Conversely, religion serves to remind science of its roots in human subjectivity. Science & religion are not separate domains; they collaborate to flesh out life. Science studies the outer domain of life and the organization of the universe, while religion studies the inner domain of life and how it should evolve.

----「宗教は科学によって浄化し、芸術化し聖化して行くことを知らねばならぬ。科学もまた宗教によって人間的真理をわすれないで居ることが出来るのである。。。科学と宗教は別個のものでは無い。それは共に生命の内容を形造るものである。科学は生命の外に宇宙の組み立てを研究し宗教は生命の裏に生命芸術を研究して如何に生かされたる實在が成長すべきかを研究するものである。」

(21 174)

50

Religion & Science: *Evolution & Social Influences*

- "There has never been a time when humanity has been without religion. Nonetheless, religion has always been under pressure from various styles of living, and at times has regressed into superstition, while at many other times it has emphasized faith at the expense of natural science, thus impeding social development."

—「人類に宗教の無かった時代は無い。然し、その宗教が、各種の生活様式の制約を受けて迷信に陥った時代もあり、信仰を重んずる結果、自然科学を無視したり、社会的発展を阻んだことも多々有った。」 (13 26-7)

Religion & Science: *Evolution & Roles*

- "The old has its value, as does the new which comes from science, art, and inventiveness. Both the old and the new are intended to adorn the human experience and strengthen the human ability to fly toward God. To live valiantly—this is true religion."

—「かうして、古いものは古い経験を持って、新しい科学や芸術はその新しいものを持って、人間殿堂を飾り、生命の神に翼ぐくまれ強められつつ、強く聖い生活をするのが真正の宗教であると私は信じて居るのである。」 (4 64)

Science

• Science is an especially useful, if narrowly specific, means of discovering God. However, God knows us and communicates with us through our conscience even before we utilize science to seek for signs of God:

「自然科学は神への最も善き細道の一つである。。。神は我々が自然科学、精神科学をもって探り当てる前に、我々の良心の奥を掴んでおられる。その良心の発生の記録、それは古くは旧約である、新しくは新約である。」 (2 : 193)

53

Philosophy

• Philosophy is not ontological but is a byproduct of Personhood.

— 「哲学は元来人格の産物である。そして基督は人格のリズムである。」 (1 : 3)

54

Philosophy: *dialectics*

• Philosophical dialectics—as sophisticated as it can be—is incompetent to explain the truth:

— 「弁証法はヘーゲルの唯心的弁証法にしても、或は印度哲学に於ける龍樹（ナガル・アルジュナ）の弁証法にしても、或ひはマルクスの弁証法にしても各々特徴はあるけれども、真理一般を説明するには無理がある。（略）かかる弁証法の研究は、印度における小乗仏教を大乘仏教に引き直す力をもっていた。そしてこの正、反、合の弁証法をヘーゲルは客観、主観、絶対の唯心的弁証法として取り上げた。マルクスは、ヘーゲルの客観より主観へ、主観より絶対への流転的生成の哲学を、更に絶対より、も一度客観への流転を継続せしめ、客観的物質の世界に絶対的真理が全部埋没しているものとして取り上げた。」

(13 : 215-216)

Religion Evolves

• In Kagawa's evolutive cosmos, like everything else, religion evolves. Since religion is a function of human consciousness in conversation with both the phenomenal world and Absolute Value (God), it undergoes a process of growth/evolution.

— 「そして宗教は歴史上の発展である。けれど神の恵みは、この波瀾の中に続く。どんなに進展するか判らない。我々はしとすと五月雨のやうに降りる神の恵みを、歴史を通して信じなければならない。」 (3 : 59)

Religion Evolves: *with Mankind's Consciousness*

- As man partially awakens, he obtains religion. This starts with ceremonies & festivals and is partial consciousness. As his religious consciousness further evolves, he takes responsibility for the shortcomings of others, which becomes the religion of redemption based on full consciousness.

— 「人間が半分目さめてくると宗教をもつようになる。それもお祭り宗教である。これが半意識である。他人の欠点まで補って行くという贖罪宗教になって初めて全意識となる。日本はいまなお半意識の状態にとまっているので、これから全意識の運動を展開しなければならぬ。」 (2

516)

57

Religion Evolves: *with Mankind's Consciousness*

- Kagawa's three evolutionary stages of religious consciousness: 1) unconscious (pure instinct), 2) semiconscious (morality), 3) full consciousness (vicarious salvation)

— 「天地には悪を救おうとする意識がある。これがキリストとなって現れた。本能による生活は無意識的、道徳的生活は半意識的、悪人をも救い、罪ある者を救わんとするのは全意識的である (略) 」 (4 498 試稿富男による解説)

58

Religion Evolves

- "Religion is only now beginning to enter its true phase. The art of life will now start to advance. Every religious movement until now has been a dress rehearsal. The art of life will probably integrate with science which devises (sic) the organization of the universe to form an even stronger religion of renewal."

— 「宗教はこれからである。生命芸術はこれから進歩するのである。今迄の凡ての宗教運動は凡て序論である。宇宙の組み立てを工夫して居る科学を併合して、生命芸術は更に力強い再生の宗教を確立するであらう。」 (21:174)

Religion Evolves

- Like everything else in Life, religion, as a dynamic between Whole and parts, mediated through faith and growth in consciousness, evolves:

— 「時の推移と共に信仰の内容も変わってゆき、信仰の客体も変わってゆく。」 (4:49)

— 「信仰は表白しないと成長 (進化) しない。」 (2:502:かっこ発表者)

— 「つまり宗教進化の絶頂に位するのがキリストである。」 (5:284)

Aesthetic Evolution = Salvation

- Transition from pessimism to optimism is salvation (or enlightenment). This process of transition is what Kagawa calls evolution. Believing in the possibility of this transition is the most significant point of religion.

—「解脱と救済は厭世的状態が楽天的状態に移り得ることを意味しているのである。之を進化と云えば云える。この一つの状態より、他のもう一つの状態に移り得る推移の可能性は、宗教に於いては最も大事な部分であって、生命の表現としての可能性から出たものである。そしてこの表現としての可能性の奥に、浄土と天国がついているのである。」 (4:86)

61

Kagawa as Scientific Theologian a la *Teilhard de Chardin*

- Kagawa talked about pure science as did Teilhard. In the final analysis, however, his thought superseded the realm of science as it revolved around purposiveness, as did Teilhard's thought.

—「テイヤール（ピエール・テイヤール・ド・シャルダン）のように純粋に科学者として語りながらしかも最後には科学を超えざるを得なかった彼の思想をめぐっていまなお繰りひろげられるこのような現実には賀川豊彦の「目的論」に対しても同じと考えてよい。」 (譯英志(?) 賀川豊彦研究第12号『「宇宙の目的」理解のために」2頁)

62

Applications for Contemporary Theology

- Kagawa's observation of religion's evolution opens the way for new theology. There is biblical precedence for this in Jesus' adding to the Jewish canon. There is a natural human tendency for people to try to finalize religious truth. This can be seen in the Jews' insistence that they have Moses and the prophets and in the author(s) of Revelations insistence that "if anyone adds or takes away from 'these words,' plagues or life will be added or taken away from that person." (Rev. 22: 18,19)
- Jesus added new laws to the Hebrew canon and changed interpretations of existing laws. He also scandalized the prevailing orthodoxy by claiming to be one with God. He repeated the declaration of Psalm 82:6, saying that "we are all gods." (John 10: 34) Why should we shy away from replicating his example and doing even greater things than he did? This is Kagawa's idea of religion.

Appendix: Various characterizations of Religion

- The sentiment of wanting to live in accordance with cosmic purpose 「宗教とは宇宙の目的に沿って行く気持ちである。」 (3:44)
- Obtaining the consciousness that we can become God's children 「宗教といふことを六ヶしく考へたら限りがない。しかし、そんなに六ヶしく考へないでも、宗教とは我々が神の子になる意識を得ることだと思へばよい。その意識が完全に体得出来たならば、宗教は最絶頂に達したものと云へる。」 (3:375)
- Creation of value aimed at freedom and autonomy 「宗教は価値運動として自由を目指してみると同時に、更に自在へと努力する。」 (6:364)
- Life improvisation 「宗教とは生命の工夫である。」 (5:54)

Appendix: Various characterizations of Religion

- 「宗教は心の工夫であり、魂の芸術である。」 (5 56)
- 「宗教とは、世の中の悪に打ち勝つ工夫である。」 (5 56)
- 「宗教に生きる事に抛って、自分は始めて神の鏡の前に座る事が出来る。すべての心は表現として、物の形を着、凡ての物は心の姿を現す。宗教は楽しい芸術であり、それは私にとって最後の芸術である。」
- 「真の宗教とは心の運動それ自身だと考へてゐる。心の働きが自然に向ひ、生理的な悩みに向ひ、或ひは未来、或ひは過去の心配事に向ふ、其処に色々な型をとって、宗教が生れて来る。私は凡て外側に向つた宗教を迷信と呼ぼう。真の宗教とは山や川等外側に向つて拝むものではなく、内側に向つて偉くなり度いと云ふ処に芽生えるものである。」 (5 15-16)

65

Appendix: Various characterizations of Religion

- 「宗教はまた、自由の極致としての自在の世界を目指すゆゑに、生死を超越し、有無を絶する無限絶対の实在を指す。それが、有限の世界を超越するゆゑに、東洋の人々は、これを「無」の符号によって探知せんと欲し、それが万能を意味する理由をもって、西洋人は、無より有を作る創造主の名をもって呼ぶ。」 (2: 439)

66

Bibliography・参考文献

- Bateson, Gregory *Mind and Nature: A Necessary Unity* Crosskill, New Jersey Hampton Press, 2002
- Bella, Robert *Tokugawa Religion: The Cultural Roots of Modern Japan* New York Free Press, 1957
- Bergson, Henri, trns Arthur Mitchell *Creative Evolution* Dodo Press, 1911
- Caputo, John, D *Hoping Against Hope: Confessions of a Postmodern Pilgrim* Minneapolis Fortress Press, 2015
- Clarke, W. Norris, S J *Person and Being* Milwaukee, Wisconsin Marquette University Press, 1993
- ——— *The One and the Many: A Contemporary Thomistic Metaphysics* Notre Dame, Indiana University of Notre Dame Press 2001
- de Chardin, Pierre, Teilhard *Christianity and Evolution: Reflections on Science and Religion* Orlando, Florida William Collins Sons & Co Ltd, 1969
- ——— *The Heart of Matter* Orlando, Florida William Collins Sons & Co Ltd, 1978
- ——— Pierre Teilhard de Chardin *Pierre Teilhard de Chardin* Maryknoll, New York Orbis Books, 2014
- Dolio, Ilija *The Unbearable Wholeness of Being: God, Evolution, and the the Power of Love* New York Orbis Books, 2013
- Earhart, H. Byron *Japanese Religion: Unity and Diversity* Belmont, California Wadsworth Publishing Company, 1982
- Edelman, Gerald, M & Tononi, Giulio *A Universe of Consciousness: How Matter Becomes Imagination* New York Basic Books, 2000
- Johnson, Francis, Howe *God in Evolution: A Pragmatic Study of Theology*
- Taught, John, F *Christianity and Science: Toward a Theology of Nature* Maryknoll, New York Orbis Books, 2007
- Hastings, Thomas, John *Seeing All Things Whole: The Scientific Mysticism and Art of Kagawa Toyohiko (1888-1960)* Eugene, Oregon Pickwick Publications, 2015
- Heisenberg, Werner, trns Yamazaki Kazuo as 「部分と全体」, (*Der Teil und das Ganze: Gespräche im Umkreis der Atomphysik*)
- Holland, John, H *Hidden Order: How Adaptation Builds Complexity* New York Basic Books, 1995
- Klapwijk, Jacob *Purpose in the Living World? Creation and Emergent Evolution* New York Cambridge University Press, 2008
- Lanza, Robert, MD *Biocentrism: How Life and Consciousness are the Keys to Understanding the True Nature of the Universe* Dallas, Texas Benbella Books, 2009

- Laszlo, Ervin *Science and the Reenchantment of the Cosmos: The Rise of the Integral Vision of Reality* Rochester, Vermont, Inner Traditions, 2006
- Mesle, C. Robert *Process Theology, A Basic Introduction* Danvers, Massachusetts, Chalice Press, 1993
- Michalson, Carl *Japanese Contributions to Christian Theology* Philadelphia, The Westminster Press, ?
- Murphy, Nancey & Stoeger, William, R. SJ eds *Evolution & Emergence: Systems, Organisms, Persons* Oxford, Oxford University Press, 2007
- Schellenberg, J. L. *Evolutionary Religion* Oxford, Oxford University Press, 2013
- Schrödinger, Erwin *What is Life?* Cambridge, Cambridge University Press, 1944
- Schroeder, Gerald, L. *The Science of God: The Convergence of Scientific and Biblical Wisdom* New York, Free Press, 1997
- Shavro, Steven *The Universe of Things: On Speculative Realism* Minneapolis, Minnesota, University of Minnesota Press, 2014
- Smuts, J. C. *Holism and Evolution* London, Macmillan & Co., Ltd., 1927